

2023年11月5日

「与える喜び」

使徒言行録 20:34-35

竹島 敏牧師

並々ならぬ決意のもとにエルサレムへ向かうパウロが、エフェソの教会の長老たちとの別れに際して最後に告げた最も大切な教えは、『受けるよりは与える方が幸いである』と主イエスご自身が言われた言葉でした。それはパウロ自身の手で実践してきたことでありました。「与える幸い」を説いた主イエスの言葉の背景には、申命記 15 章 7 節以降において、これから約束の地に入っていく神の民にモーセが語った、神の約束の言葉があります。ここでモーセは神の民に、具体的に助け合い支え合って生きてゆくことを伝えています。10～11 節には、主なる神は与える手の働きすべてを祝福される、とありますから、パウロの手の働きすべては神に祝福される幸いなのだ、ということです。

主イエスが語り、使徒パウロが身をもって証した「受けるよりは与える方が幸い」というこの言葉は、神の公平と正義が成就する神の国へと私たちの目を向けさせます。そしてこの言葉は、本来、受けるべき分を人間の「欲」によって奪い取られている人たちに目を向け、そのような状況をどうすれば本来の在りように是正できるのかを考え、実践してゆくことを私たちに促している言葉でもあると思います。

神は全ての人を同じように愛してこの世に送り出し、同じように恵みを与えようとされていることを想う時、私たちもまた、「受けるよりは与える方が幸いである」というこの主の言葉を繰り返し思い出す必要があります。そして、自らの「欲」を自制し、それぞれの仕方でもこの主の言葉に従い、神に対する謙虚さを取り戻し、主の平和を求めてゆくことが今、必要なのです。